

# なぜ標本を修復するのか

## — 標本の重要性 —



鳥羽源蔵によるアキカラマツの標本（1901年陸前高田市採集）

植物標本は、自然に生えている草花や樹木の枝先を採集し新聞紙にはさんで乾燥させた、いわゆる押し葉標本です。

標本には、いつ、どこで、誰が採ったかを示す「ラベル」がついていることが重要で、これらのデータがあれば、たとえば100年前の陸前高田の周辺には、今では見られなくなった珍しい植物が生えていたことがわかるかもしれません。

このように標本にはタイムカプセルのような働きがあり、その意味で昔に採られてきちんと作られた標本は、とても貴重なものといえます。

## 標本は情報を運ぶ タイムカプセル

今回救済した陸前高田市立博物館の植物標本には、岩手県博物界の太陽といわれた鳥羽源蔵氏の手によって、1900年代初頭に岩手県で採集された標本が多数含まれていました。鳥羽源蔵氏は、植物標本だけでなく、昆虫や貝の標本など、地元岩手の自然史資料を多数残した博物学者です。源蔵氏の植物標本は、当時の岩手県の自然のようすを知る上で大変貴重なもので、失われれば大きな損失です。

博物館の標本は、世界中のだれでもそれを調べることができるように、同じ様式で整理・保管されています。もし鳥羽源蔵氏の標本が失われることがあれば、それは岩手県にとっての損失というだけでなく、私たち人類みな損失でもあります。博物館には、貴重で有用な標本を未来に継承していくという使命があります。そのためにも被災した標本は、各地の博物館が協力して復元し、維持されていく必要があるのです。



鳥羽源蔵

(貝類学雑誌ヴィナス 第14巻より)

鳥羽源蔵氏（1872-1946）は明治5年、岩手県気仙郡小友村（現、陸前高田市小友町）に生まれ、小学校卒業後明治33年（28歳）小友小学校准訓導、明治41年（36歳）台湾総督府農事試験場技手として、テグス蚕飼育調査に関わった。大正11年（50歳）岩手師範学校教諭心得、その後昭和20年までの23年間教鞭をとる。

植物学会、昆虫学会の重要なメンバーとして研究報文は植物・昆虫・鳥・貝など160余編をかぞえ、とくに日本貝類学会創設に寄与し、30数種を越す新種、変種、新品種を記録。トバイシニナ、トバマイマイ、トバニシキなど鳥羽の名のつく貝多数。

宮沢賢治と親交があり、賢治が花巻町北上川の名勝「イギリス海岸」で発見したクルミの化石の同定を源蔵に依頼。クルミは源蔵の師である東北帝大早坂一郎博士のもとに送られ、早坂によって北米産クルミ科の高木であるバタグルミの化石として、大正15年「地学雑誌」に発表された。

